ベトナム日本文化交流センターがオープン

日本生まれの「木」がベトナムの「土」で育つ

安藤一生（あんどうかずお）
ベトナム日本文化交流センター所長

文化交流の新たな拠点がハノイにオープン

近年、ベトナムの経済発展は目覚しく、今後も年8％の経済成長が続くと見込まれています。有望な貿易相手国としての期待が高いからでしょうか、今日のベトナムでは英、仏、独などの西側先進国のみならず、中国が国家的文化政策の一環として語学・文化センター（孔子学院）を設立し、韓国もまた、広報・文化センターを設立するなど、各国が市場を競うように、活発に文化広報活動を展開しています。このような状況の下、2005年度に派遣された文化ミッションの提言を受け、さらに06年11月の日越首脳会談での安倍晋三前総理の発言を踏まえて、このほどジャパンファウンデーションの新しい事業拠点として、ベトナム日本文化交流センターがハノイに設置されました。

これまで、ベトナム側の対日イメージはきわめて良好であると報告されていますが、日本とベトナムとの関係は、これまで、政治・経済関係に偏っていたきらいがあり、今後はこのセンターの設立を契機として、文化の面での交流を促進し、相互理解の深化を図っていく必要があると思われます。

日本とベトナムの外交関係樹立35周年を祝う

3月10日、ベトナム日本文化交流センターの開設記念レセプションが日越外交関係樹立35周年事業の最初のイベントとして、日越の政府関係者、文化人、研究者、教育関係者、メディアなど約250名を集めて、メリアホテル（ハノイ）にて盛大に開催されました。

開所式は、まずはじめに坂場三男駐ベトナム大使の挨拶があり、続いて、小倉和夫ジャパンファウンデーション理事長のスピーチ、ベトナム側の主賓であるグエン・ティエン・ニャン副首相兼教育訓練相のスピーチがありました。その後、峰岸一水氏による一絃琴の演奏と、タイン・タム氏によるダンバウ（ベトナムの一絃琴）の演奏があり、最後にホアン・トゥアン・アイン文化スポーツ観光大臣によって乾杯の音頭がとられました。

小倉理事長は「このセンターはまだ生まれたばかりの種、小さな苗木、これが大きな木に生長するためには、たくさんの肥料と水、そして温かい手入れが必要です」「このセンターの木は日本のものでも、土はベトナムの土。ベトナムの土と日本の木、あるいは精神が一緒になって初めて生長できるものです」と日越2カ国語で挨拶。ベトナムのニャン副首相兼教育訓練相は、「急速な経済関係の深まりの一方で、文化・教育面での交流促進が日越の相互理解を深めるにちがいない。同センターの設立は両国の堅固な関係を反映

3月10日、ベトナム日本文化交流センター開所式にて一絃琴を演奏する峰岸一水氏（左）とダンバウを演奏するベトナムのタイン・タム氏

するものであり、日越外交関係樹立35周年という祝賀の始まりでもある」と強い期待感を表明しました。

峯岸一水氏による一絃琴の演奏では、京都の山の一年の自然風景をうたった『泊仙操』の中から、小さな小川がだんだんと大きな流れとなり、やがて大きな大河となる様を描く夏の曲を演奏したほか、タイン・タム氏との合奏などがあり、式典にふさわしい厳かな緊張感を漂わせました。

3月10日、ベトナム日本文化交流センター開所式で挨拶するグエン・ティエン・ニャン副首相兼教育訓練相

政治・経済にとどまらず文化でも日越間の緊密化を

3月11日、ハノイにおいて、日越両国の政府関係者および文化分野における民間有識者が集まり、官民合同会議が開催されました。

冒頭では、アイン文化スポーツ観光大臣から、「国交樹立35周年を迎え、日越両国は政治や経済において戦略的パートナーとしてますます緊密な関係となってきた。今後は、文化交流の面でも緊密化する必要があり、ベトナム日本文化交流センターがオープンすることを歓迎する」との挨拶がありました。その後、坂場大使も、日越間の緊密化を政治・経済的側面にとどまらず、文化の面でも発展させることが重要と強調しました。

つづいて、小倉理事長は、ベトナム日本文化交流センターが設立できたこと、ミッションがベトナムを訪問できたことに対する感謝の意を表明し、これから何をしなければならないかという問題提起を行ないました。たとえば、日本語教育の促進では日本語教師の育成が大きな課題であることなどを指摘しました。

また、『21世紀東アジア青少年大交流計画』という事業が始まっており、その中で若手のキュレーターや文化人を日本に招待したいと述べました。そしてベトナムと日本は、ともに戦争の傷跡から立ち上がったという歴史が共通しているので、紛争や戦争の傷跡から復興途上にある社会が、その文化的誇りを取り戻すことにつながるような事業をジャパンファンデーションとベトナム側とが協力してやっていきたいと挨拶しました。

分野別のセッションでは、ベトナム側より、日本語教材開発に対する支援や日本研究に対する助成、文化遺産関係者の教育に対する支援、ベトナム文化の日本への紹介に対する支援などのさまざまな要請が提出されました。また、日本側からは日本語教育を専攻する大学院や日本研究の核となるベトナム日本研究学会の創設、ベトナムの音楽専門家の日本への派遣、文学交流の促進、日本の現代の様子を伝える日本のドラマのTV放映などの提案がなされました。

伝統文化からポップカルチャーまで多様な交流への期待

3月12日、ホーチミン市内のホテルで、日越間の文化交流の現状と今後の改善をテーマに日越民間対話が開催されました。参加者は、日本・ベトナム双方から映画・演劇・文学などにかかわる文化人が集まり、各分野ごとに自由な意見交換を行ないました。

この民間対話に参加した映画監督フ

3月12日、ホーチミンにおける民間対話では、日越の文化人が集まり、幅広い文化交流について意見を交換した

ァム・ホアン・ナム氏は、現在の日本文化紹介は着物や生け花などの伝統文化に偏りすぎていると指摘し、これからの文化交流は若者を対象とすべきで、J-POPのような現代文化を紹介してほしいと声をあげました。また、文学に関して、作家のグエン・ザン・ラム氏は、「日本文学はノーベル賞作家を2人も輩出していながら、依然としてベトナムで紹介されることが少なく、翻訳の質も低い」と述べ、翻訳の質の向上と、ベトナム語でも日本の文学が学べる環境づくりを求めました。さらに、ベトナム文学に関しても、「日本へのベトナム文学の紹介は十分なされていない。今後は古典文学のみならず、現代文学作品の翻訳に対する助成機関をつくってほしい」と要請しました。

日本研究・日本語教育に関して、ホーチミン大学人文社会校のグエン・ティン・ルック氏は、「現在、日越間の国際的な共同研究が行なわれているが、助成金を得た日本人研究者による共同研究ばかりで、ベトナム人による日本研究の共同研究プロジェクトがない」と指摘し、研究者の育成に対する支援を要請しました。また、日本語教育の現状について、学習者の数がベトナム北部より南部で増えているにもかかわらず、その質は依然として高くないこと、南部の学習者の多くが、就業のためなど実用的な目的で日本語を学んでおり、深い研究目的で学ぶケースが少ないと説明されました。そのほかには、「日越の文化交流は経済交流に比べ遅れている。日本の発展はその伝統の上に現代的なものをつくり上げたことに特徴があるので、その経験を伝えてほしい」など、さまざまな意見や提案がありました。

これに対し、日本側のコメントでは、まず、小倉理事長より、現状認識においてベトナム側と日本側にずれがあること、ジャパンファウンデーションの事業も、最近では、現代文化の紹介が主流であり、伝統的な文化紹介はほとんど行なっていないとの説明がありました。

その後、各参加者の専門分野ごとに

※敬称略

ハノイ
日越文化交流フォーラム（官民合同会議）

日時 2008年3月11日

場所 ベトナム文化スポーツ観光省

共同議長 山本忠通
（日本／外務省広報文化交流部長）
グエン・ヴァン・ニャン
（ベトナム／文化スポーツ観光省国際関係局次長）

参加者（氏名・所属・専門分野）

［日本］ 上野邦一（奈良女子大学特任教授／文化遺産保存）
岡 素之
（住友商事会長、日本経団連日越経済委員会委員長／人材育成）
小倉和夫（ジャパンファウンデーション理事長）
小野幸嗣（文部科学省国際局課長補佐／留学生交流）
坂場三男
（駐ベトナム日本国特命全権大使／日越関係全般）
高樹のぶ子（作家／文学）
徳丸吉彦（放送大学客員教授／伝統文化・音楽）
長谷川祐子（東京都現代美術館事業課課長／美術）
松谷孝征（日本動画協会理事長／映像・漫画・アニメ）
古田元夫（東京大学教授／研究交流）

［ベトナム］ ホアン・トゥアン・アイン（文化スポーツ観光大臣）
レー・ゴック・ディン
（文化スポーツ観光省国際協力局次長）
ヴー・ハック・リエン（越日文化交流協会会長）
ゴ・スアン・ビン
（東北アジア研究院院長兼日本研究センター長）
グエン・バン・ハオ（ハノイ貿易大学）
グエン・フォック・フン（文化遺産局次長）
ブイ・ドック・ティエップ
（ベトナム教育訓練省戦略および教育プログラム研究員事務所長ほか）

プログラム
- 総論（発表）：日越文化交流に関する現状および課題について
- 各論1（発表）：文化芸術交流について
  文化遺産保存について
- 文化交流、文化協力についての自由討論
- 各論2（発表）：知的交流（研究交流、相手国研究）について
  人材育成（相手国語教育、留学生交流、青年指導者教育）について
- 教育交流、研究交流についての自由討論

※敬称略

ホーチミン
日越文化交流フォーラム（民間対話）

日時 2008年3月12日

場所 ニューワールドホテル

司会進行 小倉和夫（ジャパンファウンデーション理事長）

参加者

［日本］ 上野邦一（奈良女子大学特任教授）
岡 素之
（住友商事会長、日本経団連日越経済委員会委員長）
高樹のぶ子（作家）
徳丸吉彦（放送大学客員教授）
長谷川祐子（東京都現代美術館事業課課長）
古田元夫（東京大学教授）

［ベトナム］ チュオン・ゴック・アィン（女優）
ダム・ヴィン・フン（歌手）
グエン・ザン・ラム（作家）
グエン・ティン・ルック
（ベトナム国家大学ホーチミン市科学社会人文校日本学科長）
リー・ホアン・リー（アーティスト）
レー・ゴック・チャ（ホーチミン師範大学教授）
ファン・ホアン・ナム（映画監督）
タィン・ロック（舞台俳優）

プログラム
1：出席者紹介
2：水城幾雄在ホーチミン総領事挨拶
3：問題提起
4：ベトナム側発言
5：日本側発言
6：自由討論

3月11日、文化スポーツ観光省会議場の前で記念撮影に臨む官民合同会議の出席者

発言があり、放送大学客員教授で音楽学者の徳丸吉彦氏は、「伝統音楽の継承には新たな教育制度を創設することが重要である」と述べるとともに、ベトナムの伝統音楽の専門家を日本に派遣し、すぐれたベトナムの音楽を日本に紹介すべきだと提案しました。

東京都現代美術館チーフキュレーターの長谷川祐子氏は、「コンテンポラリーアートのよさは建築にある。日本においては、伝統と近代が交わった、すばらしい作品があるので、日本の建築とコンテンポラリーアートの様子を見ていただきたい」と、日本のアートの現状についてスライドを使用して紹介しました。また、小説家の高樹のぶ子氏は、文学は心情を伝え合うことのできる有効な器であるとし、日越文学交流の重要性について強調しました。東京大学教授でベトナム現代史が専門の古田元夫氏は、東アジアの交流上意義があるとして、漢字教育の復活を提案しました。

最後に民間の立場から、住友商事岡素之会長が、「交流するということは、人びとの暮らしを豊かにするから交流するのであって、その分野の人が真剣になって望まないと交流は進まない」とコメントし、同社がシンガポールで提供したテレビ番組「ジャパン・アワー」の一部を紹介しました。

ホーチミンでの民間対話は、多様な分野の文化人が一同に会し、率直な意見交換を行なったことに意義がありますが、その成果として、多様な分野での文化交流の必要性を強く感じさせるものとなりました。

未来を担う若い世代を育む文化交流事業へ

日越文化交流フォーラムでは両国間、両国民間の相互理解の促進のため、ベトナムにおける日本語教育、日本におけるベトナム語教育の拡充、ならびに日本研究、ベトナム研究の促進が重要であり、このための努力をさらに続ける必要があること、また、両国民間の理解の促進においては、現在の生活文化や若者文化の紹介が大切であり、また市民レベルの交流を一層促進することが重要との認識が共有されました。

ベトナム日本文化交流センターとしては、25歳以下の若者が、全人口の5割を占めるという人口構成を持つベトナムにおいては、これら若い世代を対象とした事業を中心に展開していくべきだと考えています。ジャパンファウンデーションの基幹事業である、日本語事業、日本研究・知的交流、文化芸術交流事業の3分野をバランスよく実施していくこと、日本語および日本研究分野のネットワークの形成、国内外の関係機関との連携が、今後の重要課題です。

日本語事業分野では、03年から中等レベルの日本語教育試行プロジェクトが開始されましたが、現在、教員確保の問題や教師のレベルアップ、教材など、さまざまな問題を抱えています。当センターは、まず、これらの問題に取り組んでいかなければなりません。日本語教育への支援を中心としつつ、日本とベトナムの相互理解推進のために、活発に支援事業を行なっていきたいと考えています。

あんどう かずお●ジャパンファウンデーション クアラルンプール日本文化センター所長、ニューデリー事務所長、ジャカルタ日本文化センター所長を歴任後、本年3月より現職

2月15日、ベトナム日本文化交流センター設立決定書を文化スポーツ観光省から受け取る筆者（左）